

# 近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワーク

\* 吉 田 剛

## 要 旨

本稿は、地理学習者のウェルビーイング実現に向け、地理的概念を学習の基礎・基本とする近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークの創造を目的とした。主な成果は次のとおりである。(1) 国内外の地理教育の潮流から地理教育の基礎・基本となる地理的概念を中心に考察し、一貫地理カリキュラムの構成領域を想定した。(2) OECD『Education 2030』のコンピテンシーの要素に着目しながら、想定した一貫カリキュラムの構成領域との共通性を吟味し、一貫地理教育カリキュラムの内容構成(スコープ)の原理を根拠付けた。(3) 現行の幼稚園教育要領解説や小中高の学習指導要領社会解説・地理歴史解説における地理的概念に関わる記述を分析し、地理的概念を主柱にする一貫地理教育カリキュラムとして地理的概念の順次性や序列階層性について考察し、学習段階(シークエンス)の原理として導き出した。その上で近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークを理論化した。

**Key words** : Society5.0, ウェルビーイング, OECD『Education2030』, 地理的概念, 持続可能性

## I はじめに

近未来社会の教育には、ICT (Information and Communication Technology) 活用の高度化、デジタル教科書教材やAI (Artificial Intelligence: 人工知能) 利用の進展、DX (Digital Transformation: デジタルトランスフォーメーション) や Society5.0 (持続可能性と強靱性を備え、国民の安全と安心を確保するとともに、一人ひとりが多様な幸せを実現できる社会) などへの対応が求められている。幼稚園・小学校・中学校・高等学校の地理教育においても実空間の様々な制約と移動を伴わない情報社会の著しい変化に直面し、地理的事象とその意味・意義の変化や、それらに潜在的に関わる普遍的な地理的概念の扱い方などを見直す時期に来ている。よって近未来社会に応じた効果的な地理教育のあり方を Society5.0を踏まえ、地表面における自然と人文の諸事象間の意味や意義などの学習を通じて人間形成のための教育を考えていく必要がある。

内閣府の総合科学技術・イノベーション会議報告(2022)は、「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」を報告した。デジタル化の影響やAIの飛躍的進化により、生活にDXによる変化が始まり、Society5.0時代に一人ひとりが当事者意識を持ち、他者と協働しながら新たな価値創造を生み出し、これまでの工業化社会とは違う「思考・発想」を必要とした。また子どもを取り巻く環境は、ICT活用の多様化やスマートフォンを多くの中高生が持つ時代に入り、学校教育では、メディア・リテラシーを育む中で子どもたちのデジタル・シティズンシップ(デジタル技術の利用に関わる行動規範)<sup>1</sup>育成を課題とした。そして様々な教育の格差や困難さを乗り越えるデジタル技術の成果は、人々の生活を一変させ、その中で新たな価値創造を高めていくためには、俯瞰的な視野で物事をとらえ、分野横断的な多様な「知」の集結、「総合知」を必要とした。

また総合科学技術・イノベーション会議(2022)は、先

\* 宮城教育大学大学院教育学研究科

1 坂本(2020)の見解による説明。

進教育を見据える OECD (Organisation for Economic Cooperation and Development: 経済協力開発機構) の『Education2030』による個人と社会のウェルビーイング実現に向けた子ども一人ひとりの「エージェンシー」(変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力)や、「変革をもたらすコンピテンシー」(新たな価値を創造する力、対立やジレンマを克服する力、責任ある行動をとる力)の必要性から、「新たな価値創造」「イノベーション創出」「一人ひとりの多様な幸せ」を目指し、子どもの可能性を最大限引き出す教育・人材育成システムの転換を求めた。そして「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、そろえるから伸ばす教育へ転換し、子どもたち一人ひとりの多様な幸せを実現するとともに、一つの学校がすべての分野・機能を担う構造から協働する体制を構築し、デジタル技術を最大限活用しながら社会や民間の専門性などを活用する組織への転換を求めた。

以上から近年の主要な教育政策を踏まえ、近未来社会に求められる地理教育の課題を整理・検討すると、次の四つが考えられる。

①変容する地理的事象とその意味・社会的意義の取り上げの吟味や更新は、重要である。しかし地理教育における支柱を考えると、まずは地理学の特徴を象徴する地理的概念を学習の基礎・基本として一層重視する必要がある。変容する地理的事象とその意味・社会的意義の背景にある地理的概念の本質には、普遍性を伴うからである。既にカリキュラム研究分野で鍵概念の重要性が指摘されているが、地理教育における鍵概念となる地理的概念は、我が国も含め、多くの諸外国地理教育カリキュラムのねらいや目標などにおいて含まれ、重要なものとなっている。ところで地理教育研究史を20年ほど遡ると、吉田(2022)によれば、我が国の2000年前後の地理教育論争(山口氏による「分化社会科」を基盤とする総称「地理」からの地理教育論 VS 草原氏による「総合社会科」を基盤とする地域の枠組みからの地理教育論)では、地理的概念の観点から、双方が主張する「地理」の意味の共通点や相違点について検討されず、地理的概念の重要性が見過ごされていた。しかしその後、地理教育カリキュラムにおける地理的概念の重要性が再確認できる成果が蓄積されてき

ている。例えば吉田(2011)は、社会科地理教育カリキュラムにおける地理的概念と地理的技能の理論的な枠組みをつくり、吉田(2016,2017)や吉田・管野(2016)は、我が国も含めた諸外国地理教育カリキュラムにみる地理的概念の比較・分析や、地理的概念の内容と方法の二面性や序列階層性について考察した。また管野(2018)は、オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州地理シラバス2015年版(NSW 地理2015)における地理的概念の一貫性を分析して地理的概念の順次性を明らかにした。

②個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められている学校教育に向けて、一人ひとりの地理学習者のための地理教育を保障しながら、民主主義を進展させる近未来社会的市民性を育成する必要がある。従来の地理教育研究において、児童・生徒の一人ひとりの自律的な地理学習に着目した成果は、十分に見当たらず、新たな時代の地理教育研究の課題としてみられる。近未来社会の先進的な資質・能力の要素として検討を要するものとして前述の教育政策を踏まえると、一人ひとりのウェルビーイング実現や、『Education 2030』などがあげられる。

③人は生まれながらにして、自然に成長していくと同時に、環境に対して自ら能動的に働き掛ける力がある。とくに幼児期の発達においては、幼児自身が自発的に環境に関わり、生活の中で状況と関連付けて身に付けていくことが重要とされている。しかし幼児期について、これまでの地理教育では、ほとんど着目されて来なかった。幼児期から一貫して、一人ひとりの自律的な地理学習を考える意義があり、幼児期の地理教育では、長期的な見通しに立って、体験などを通じた他者や環境とのかかわりとともに、善悪の判断につながる基本的な区別が自律的にできるように学習させ、近未来社会的市民性の育成に繋げていく必要がある。

④①②③をもとに教育効果を一層高めるために、近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムを創造する必要がある。今日、地理学関係学会の支援もあって必修化された高等学校「地理総合」の教材開発・指導法に関する実践的な情報発信が盛んになされてきている。ただしそれに止まらず、地理教育全体の一層の充実を図り、様々な学校種の教員が体系的に地理教育を見通せる幼小中高一貫地理教育

カリキュラムを創造していくためには、そのフレームワークを理論的に根拠付けて明確に示す必要がある。従来の我が国に関する一貫地理教育カリキュラムの総体的な研究においては、山口・西木・八田ほか6名(2008)による地誌を中心とした一貫カリキュラム試案や、井田(2016)による社会科などの総合性と地理学の専門性から理念的に論じた成果がある。しかしそれらには、例えば地理的探究・技能に関する議論が不十分であり、一貫の長いスパンから各学習段階の特色を踏まえ、様々な一貫軸をもとでマクロ・マクロの双方から検討することが難しく、理念的、経験的にも大括りとなる。まして就学前の幼稚園教育も含め、近未来社会に向けた一貫性の有用性を十分に見いだす成果は、皆無に等しい。

そこで本稿では、Society5.0の近未来社会の個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を求める学校教育を見据え、一人ひとりの地理学習者のウェルビーイング実現に向けて、地理的概念を学習の基礎・基本として近未来社会的市民性の育成を目指す、近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークについて理論的に根拠付けて構築することを目的とする。方法・手順は、次の五つをとる。

- ①国際地理学連合地理教育委員会の指針となる『地理教育国際憲章』(中山, 1993)や『ルツェルン宣言』(大西, 2008),あるいは我が国の地理教育に関する日本学術会議地理教育分科会などの主な報告や『ESD for 2030』の検討を行い、世界の教育政策的な地理教育カリキュラムの潮流について考察する。その上で本稿の問題意識や先行研究を踏まえ地理教育の学習の基礎・基本となる地理的概念を中心に検討し、一貫地理教育カリキュラムの構成領域を想定する(Ⅱ章)。
- ②近未来社会の教育を見通す『Education 2030』より、カリキュラムの構成領域、ウェルビーイングやコンピテンシーの要素をもとにした「エージェンシー」「変革するコンピテンシー」などを考察する(Ⅲ章)。
- ③①②の成果から、『Education 2030』のカリキュラム構成領域と、想定した一貫地理教育カリキュラムの構成領域を対比し、共通性などを検討・考察することを通して、『Education 2030』の先進的な政策に依拠するカリキュラム論から一貫地理教育カリキュラムの内容構成の原理を根拠付ける(Ⅳ章)。

- ④一貫地理教育カリキュラムにおける地理的概念による学習段階の原理を見いだすために、我が国の幼小中高一貫地理教育カリキュラムの創造を見据え、平成29年版幼稚園教育要領解説や平成29・30年版中小高の学習指導要領社会解説・地理歴史解説など(文部科学省, 2018a; 2018b; 2018c; 2019)の地理的概念に関わる記述の意味について分析・考察する(Ⅴ章)。
- ⑤以上を総合し、近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークを構築する(Ⅵ章)。

## Ⅱ 一貫地理教育カリキュラムの構成

### 1) 『地理教育国際憲章』

国際地理学連合の地理教育委員会(IGU-CGE)は、1992年に『地理教育国際憲章』を制定した。その第三章「地理学の問いと概念」では、地理学の中心概念として、「位置と分布」「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」「地域」が地理教育のねらいに近いかたちで説明された。そしてそれらは、1984年に米国地理学会と全米地理教育協議会より開発された『地理教育ガイドライン』の「地理学五大テーマ」と同様であった。このことから中山(1993)は、米国地理教育における地理的概念の世界的な影響について指摘した。その後、暫くの時間を経て、我が国もその影響を受け、平成29・30年版の現行中学校学習指導要領地理教育カリキュラムにおいて『地理教育国際憲章』の五つの地理的概念を取り上げ、地理的見方・考え方の主要な視点として組み込んだ。ただし我が国の場合は、社会系教科地理教育カリキュラムであるために、地理的概念は、問いと共に考える手立ての視点となって、概ね学習の方法的側面に用いられるように指示された。

第四章「地理学の教育への貢献」では、地理教育のねらいが「知識理解」「スキル」「態度形成」の三つから説明された。「知識理解」では、前述の五つの地理的概念に基づくやや具体的な地理的事象間の意味が、「スキル」では、地図・写真・統計の活用やフィードバック技法などの具体的な作業技能と地理的課題の発見などから探究が説明された。「態度形成」では、地理的事象への関心、自然と人間への認識と環境保全、意思

決定や地理的価値観、生活に結び付く地理的知識とスキルの応用、人々の平等や権利の尊重、様々な地域規模における問題解決への貢献などが説明された。第五章「地理教育の内容と扱い」では、地理学二大体系となる地誌学と系統地理学からの学習の内容構成と方法が説明された。

## 2) 『ルツェルン宣言』

続いてIGU-CGEは、国連の持続可能な開発のための教育10年(UN Decade of Education for Sustainable Development: DESD)(2005-2014)を契機に、地理教育における持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development: ESD)の促進をねらい、『地理教育国際憲章』を発展させ、『持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言』(『ルツェルン宣言』)を2007年に宣言した(大西, 2008)。

『ルツェルン宣言』では、「A. 持続可能な開発のための教育への地理学の貢献」として「人間・地球」エコシステムが中心概念となり、「地球システム」と「人間システム」とに分けられ、さらに持続可能な開発は、「自然」「経済」「社会」の側面、実行のための「戦略」「地理的能力」「高次な学際的能力」より説明された。「地理的能力」は、『地理教育国際憲章』の「知識理解」「スキル」「態度形成」に相当するが、全般的には、詳細に説明されず、とくに「スキル」(作業技能や探究)への具体的な対応は、読み取れない。ただし汎用的な「高次な学際的能力」には、探究の意味が読み取れる。「知識理解」についても、「自然システム」「社会・経済システム」「空間概念」の三つから端的に示され、「態度形成」も「世界人権宣言」に基づく様々な地域規模の課題と解決策への検討・努力と端的に示されるのみとなった。よって「A. 持続可能な開発のための教育への地理学の貢献」では、『地理教育国際憲章』における地理的概念に基づく枠組みから離れ、DESDのねらい・領域・戦略など(中山・佐藤, 2011)を優先し、それを受けるかたちで構成されたものとしてみられる。

「B. 持続可能な開発のための教育に向けた地理カリキュラム開発の基準」では、概ね『地理教育国際憲章』の第六章「振興の方針と方策」に相当し、諸外国のナショナルカリキュラムになり得る基準として、「目的」「テーマ選定」「地域選定」「学習アプローチ」の構成

領域から整理された。そして「C. 地理学のESDに向けたICT)の重要性」では、概ね『地理教育国際憲章』の第七章「地理教育の研究」、第八章「国際協力」に相当するが、現代のICTと地理学との関係が追加された。

総じて『地理教育国際憲章』では、地理学の中心概念となる地理的概念を基礎・基本とする地理教育のねらいから「知識理解」「スキル」「態度形成」の構成領域が示された。しかし『ルツェルン宣言』では、DESDによる教育全般に汎用性のある人間形成の理念が優先され、それを地理的概念の要素から説明するかたちをとり、『地理教育国際憲章』でみられた一般的な「知識理解」「スキル」「態度形成」の構成領域が複雑となった。

## 3) 地理的概念と「持続可能性」

吉田(2016)は、『地理教育ガイドライン』の「地理学五大テーマ」と、『地理教育国際憲章』における各地理的概念を説明する記述から、「環境保全、相互作用による社会変化、地域格差の是正、国際協力、人権や様々な地域的アイデンティティの尊重など」に向き合う資質となる価値・態度・行動の意味を拾い出し、地理的概念の「持続可能性」として、「地理的な環境や地域の持続可能な社会形成のために関わるものごとすべて」と規定した。そしてその構成要素を「○自然的・人文的環境、○様々な地域における共存共生、○様々な地域における人権や社会集団の主権やアイデンティティの尊重などの持続可能な社会形成に関わるものごと」と示した。この見解によって、『地理教育国際憲章』の地理的概念に含まれる「持続可能性」の意味と、『ルツェルン宣言』のDESDによる「持続可能性」の位置付けとは、地理的概念や価値態度との関係や、その要素の取り上げ方などの論点が見いだせる。

近年、日本学術会議地域研究委員会の地球惑星科学委員会合同地理教育分科会(2017)は、「持続可能な社会づくり」に向けた解決すべき課題の明確化や、「持続可能な社会づくり」に資する地理教育の内容充実などの提言を行った。これには、国際連合による2015年の持続可能な17開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)、2013年ユネスコ総会及び2014年国際連合総会によるESDグローバル・アクション・プログラム(Global Action Program: GAP)、国際地理学

連合 (International Geographical Union : IGU) によるフューチャー・アースの動き, SDGs の具体的な提示や実行あるいは成果達成の評価の取り組みなどが踏まえられた。そして地理教育分科会は, 世界的な取り組みの動きを受けて, 高等学校「地理総合」「地理探究」の教科書内容として適切に反映させるべきとし, 近未来社会に向けて準備すべき政策的な課題を提示した。よって「持続可能性」を重視する高等学校地理教育のねらいや内容構成への改善が求められた。その点, 吉田 (2016) によれば, 英国中等地理教育カリキュラム 2007年版, 香港中学校地理教育カリキュラム 2011年版, オーストラリア連邦の幼小中高一貫地理教育カリキュラム 2013年版などには, 鍵概念となる地理的概念として, 地理的価値態度に関わる「持続可能性」が明確に位置付けられている。

#### 4) 『ESD for 2030』の進展

ところで松井 (2020) によれば, 国際ユネスコは, 持続可能な社会の形成のための自己変革 (人間の意識や行動の変化) 概念として, ESD と地球市民教育 (GCED) の概念を同義とした。ただし ESD は, 自己変革による自然的環境の問題, GCED は, 自己変革による人間同士の関係性・意識の問題解決を前提とした理解となり, 対象となる環境・社会・経済の問題と, 人間同士の関係性・意識の問題には, 差異がある。しかし日本ユネスコ国内委員会 (日本ユネスコ) は, ESD に GCED を包含させ, 人間の意識や行動の変容によって, 環境・社会・経済と人間同士の関係性・意識の両方に変容がもたらされるとした。

日本ユネスコによる ESD の見解は, 地理教育に求められる近未来社会的市民性の点から考えると, 生産的な議論の方向にある。ただし我が国の ESD に関する地理教育においては, 主に環境・社会・地域の関わりを学習するものが重視されてきたために, GCED の人間同士の関係性などの点で十分に掘り下げられなかったことが窺える。その点, 吉田 (2016) が示した「持続可能性」の構成要素のうち, 「〇様々な地域における人権や社会集団の主権やアイデンティティの尊重」は, GCED の観点に近い。そもそも「地理学五大テーマ」や『地理教育国際憲章』における地理的概念の説明には, そのような点が含まれていたが, 我が国で十分に意識されていなかったことも窺える。このことから近

未来社会的市民性の育成に向けて, 我が国の地理教育における ESD 概念を進展させる意義が見いだせる。

永田 (2020) によれば, 2019年に国連総会で採択された『ESD for 2030』(持続可能な開発のための教育 : SDGs 達成に向けて) は, 日本政府提案 (2019年以降の ESD) や国際ユネスコの総会採択を経たユネスコ主導の GAP の後継となり, SDGs の17目標達成に寄与する。永田 (2020) は, 『ESD for 2030』の特徴を, 「鍵となる文脈 (〇ユネスコ主導から加盟国主導の ESD へ, 〇深い次元での変容, 〇 ESD の曖昧さ) 」, 「求められる熟慮 (〇変容的行動, 〇新たな学習の挑戦へ, 〇テクノロジーとの関係性) 」, 「実施の枠組み (〇持続可能な開発そのものを問う ESD, 〇 SDGs に向けた学習の意義) 」の三つから解説し, 『ESD for 2030』によって, ESD が SDGs 実現のために実践の意識が高まるが, SDGs 目標にない「文化」も対象にし, 自律的で行動する市民となる点に ESD の真髓が見いだせると論じた。そこで SDGs 目標を対象にすることに止まらず, ESD の新たな動向を踏まえ, 地理教育カリキュラムにおいても「持続可能性」のあり方を再確認する必要がある。

#### 5) 地理的概念を支柱とする一貫地理教育カリキュラムの構成領域

本稿は, 『地理教育国際憲章』などに含まれていた人間形成に向けた「持続可能性」の意味を地理的概念として地理的価値態度に関するものとして, 他の地理的概念と同様に位置付け, 地理教育カリキュラムのねらいや内容構成などにおいて改善する。そして「持続可能性」の意味には, 人間同士の関係性や意識, 「文化」面も視野に入れる。地理的概念として「持続可能性」をみることについては, 大野 (2019) の「教科カリキュラムを開発・編成するためには, 学習者に適した授業が実践できるように, 専門領域の知識を教科内容へと変換しなければならない」とする, “Didactic Transposition” の考え方に立つ。

ところで吉田 (2020a) は, 「学術 / 教育」と「統一 / 不統一」の軸による四つの座標から, 地理的概念が「学術」と「統一」の座標に位置し, 原理をみるもの, 社会的領域性において広く, 社会的変容性において不変となる可能性があるものと論じ, この見解には, 地理学に依拠する学習の基礎・基本を担う地理的概念の普

遍性の意義が確かめられる。また吉田(2016)を参考にすると、諸外国地理教育カリキュラムには、様々な地理的概念の表現がみられるが、その中で共通性が高いものについては、鍵概念として普遍性が高いものとしてみられる。とくに『地理教育国際憲章』にみる地理的概念は、我が国も含めて国際的に影響を与えたものであり、その象徴として捉えられる。また大野(2019)に基づく、『地理教育国際憲章』にみる地理的概念は、専門領域の共同体の内で吟味された上で、妥当な、真正な知識として受け入れられ、共同体にとって役立つかたちで表現されている。

以上の議論に、本稿の問題意識や前述の地理的概念に関する地理教育カリキュラム論を踏まえ、一貫地理教育カリキュラムを検討すると、次の五つからそのカリキュラムの構成領域を想定することができる。

- ①カリキュラムのねらいは、目標となる相互に関係し合う【内容】【方法】【価値】の三つの構成領域を従属させ、それらを総括する。
- ②【内容】は、知識の理解の発達に関与し、地理的事象・地理的事象の意味・地理的事象の意味における社会的意義による「地理的事象の三層」、それらの背景に潜み、地理学に依拠する学習の基礎・基本を担う地理的概念(「位置と分布」「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」「地域」「持続可能性」)によって構成される。
- ③【方法】は、思考力・判断力・表現力などに関わるスキルの発達に関与し、思考する際に視点や方法として活用される地理的概念(いわゆる地理的見方・考え方)、学習の探究のための地理的探究、学習の作業技能の道具となる地理的技能(ICTやAI、新しいテクノロジーの活用を含む)、【内容】のまとまりづくりにも関わる地理学体系アプローチ(地誌、系統地理、テーマ地理)によって構成される。
- ④【価値】は、【内容】と【方法】を通じて得られる地理的価値態度や近未来社会的市民性の発達に関与し、「持続可能性」をもとにESDに関わる持続可能な社会づくりに向けた地理的価値態度や『Education 2030』のコンピテンシーなどによって構成される。
- ⑤地理教育カリキュラムの一貫性の軸において、【内容】【方法】【価値】の三つの構成領域の重なり合いにおいて地理的概念を支柱として位置付ける。そして【内容】には、「地理的事象の三層」を、【方法】に

は、地理的探究、地理的技能、地理学体系アプローチを、【価値】には、近未来社会に必要なコンピテンシーなどをもとにした市民性を位置付ける。ところで白井(2020)によれば、『Education 2030』より、カリキュラムの役割は、○各学問分野の原理に基づく「学習基盤構築機能」、○個々の権利や社会的責任やウェルビーイングのための「民主主義維持機能」、○学校教育などが担う「国民統合機能」とされる。これらから一貫性の支柱に据えた、【内容】【方法】の地理的概念は、とくに「学習基盤構築機能」を担い、【価値】の地理的概念「持続可能性」は、ESDに関わる地理的価値態度に関わり、「民主主義維持機能」「国民統合機能」を担うように位置付けられる。

### Ⅲ 『Education 2030』によるカリキュラム

#### 1) 『Education 2030』とは

『Education 2030』は、OECDが2015年から開始し、2030年の近未来社会で必要となるコンピテンシーを考えるための多国間プロジェクト報告である。1997年から開始した多様なコンピテンシー概念の整理をねらいとした“Definition and Selections of Competencies”(DeSeCo)プロジェクトの見直しが背景にある。

『Education 2030』は、第1テーマ「生徒が未来を生き抜き、世界を形作っていくためには、どのような知識やスキル、態度及び価値観が必要になるのか」、第2テーマ「教育システムは、どのようにしてこれらの知識やスキル、態度及び価値観を効果的に育成することができるのか」と設定し、そのためのコンピテンシーの要素の構成領域は、「知識」「スキル」「態度及び価値観」とした。「知識」は、「教科の知識」(Disciplinary Knowledge)、「教科横断的知識」(Interdisciplinary Knowledge)、「エピステミックな知識」(Epistemic Knowledge)、「手続的知識」(Procedural Knowledge)に分類され、「スキル」は、「認知的・メタ認知スキル」、「社会・情動的スキル」、「身体・実用的スキル」、「態度及び価値観」は、「個人の態度及び価値観」、「地域の態度及び価値観」、「社会全体の態度及び価値観」、「グローバルな態度及び価値観」に分類された。白井(2020)によれば、現行の学習指導要領の「資質・能力」の柱である「知識・技能」「思

考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」は、『Education2030』の「知識」「スキル」「態度及び価値観」と重なり合う部分がある。

2) 一人ひとりのウェルビーイングを目指して

DeSeCo の課題に対して、『Education 2030』では、キー・コンピテンシー育成に繋がるカリキュラム設計・評価・教育法・学校マネジメントに関する調査から、実行可能なコンピテンシーの枠組みの策定を目指した。コンピテンシーを身に付けていく目標として、ウェルビーイングの具体となる個人レベルの11指標 (SDGs17目標と関連) と、社会レベルの「経済」「人的」「社会」「自然」の資本との循環関係 (エコシステ

第1表 OECD ウェルビーイング指標と国連の持続可能な開発目標との対応

ウェルビーイング	持続可能な開発目標 SDGs (UN)
1.仕事*	8.働きがいも経済成長も 9.産業と技術革新の基盤をつくろう
2.所得*	1.貧困をなくそう 2.飢餓をゼロに 10.人や国の不平等をなくそう
3.住居*	1.貧困をなくそう 3.すべての人に健康と福祉を
4.ワークライフバランス**	3.すべての人に健康と福祉を 5.ジェンダー平等を実現しよう 8.働きがいも経済成長も
5.生活の安全**	16.平和と公正をすべての人に
6.主観的幸福**	すべての目標に関連している
7.健康状態**	3.すべての人に健康と福祉を
8.市民参加**	5.ジェンダー平等を実現しよう
9.環境の質**	6.安全な水とトイレを世界中に 7.エネルギーをみんなにそしてクリーンに 12.つくる責任 つかう責任 13.気候変動に具体的な対策を 14.海の豊かさを守ろう 15.陸の豊かさを守ろう
10.教育**	3.すべての人に健康と福祉を 4.質の高い教育をみんなに 5.ジェンダー平等を実現しよう
11.コミュニティ**	11.住み続けられるまちづくり 17.パートナーシップで目標を達成しよう

\*「物質的条件」\*\*「生活の質」。個人のウェルビーイングが「物質条件」から「生活の質」へ、社会レベルのウェルビーイングの資本 (自然・人的・経済・社会) に貢献し、再び個人のウェルビーイングに通じるエコシステムの中にいる人間として考える。

白井 (2020) より筆者作成。

ム) から説明した (第1表参照)。加えて「知識」「スキル」「態度及び価値観」のもとにあるコンピテンシーの要素を、『ラーニング・コンパス』 (学習枠組み)<sup>2</sup>に「エージェンシー」「変革をもたらすコンピテンシー」「AAR (Anticipation Action Reflection) (コンピテンシーの発達・育成サイクル:見通し, 行動, 振り返り)」から示した (第2表参照)。

ウェルビーイングの具体とともに示される「変革をもたらすコンピテンシー」は、AIが普及する未来社会においても人間固有の力であり、「エージェンシー」「変革をもたらすコンピテンシー」「AAR」の方略は、近未来社会にも通じる資質・能力とみられる。これらに対応するコンピテンシーの要素の多くは、ソーシャルメディアなどの時代の変化に応じた新たなメディア・リテラシーに役立てられ、デジタル技術の利用に関する行動規範を保持すること (中橋, 2021) や、「民主主義維持機能」「国民統合機能」にも働くものとみられる。

第2表 『ラーニング・コンパス』主要部へのコンピテンシー要素の対応

「ラーニング・コンパス」の主要部		コンピテンシーを構成する要素の対応
エージェンシー		○アイデンティティ, ○帰属意識, ○モチベーション, ○希望, ○自己効力感, ○成長志向の考え方。
シ 変 革 を も た ら す コ ン ピ テ ン シー	新たな価値を創造する力	○目的意識, ○好奇心, ○開かれた考え方, ○批判的思考力, ○創造性, ○敏捷性, ○協働性, ○リスク管理, ○適応力。
	対立やジレンマに対処する力	○認知的柔軟性, ○他者視点の獲得, ○共感性, ○敬意, ○創造性, ○問題解決能力, ○紛争解決能力, ○レジリエンス, ○寛容さ, ○責任感
	責任ある行動をとる力	○統制の所在, ○誠実さ, ○思いやり, ○敬意, ○批判的思考力, ○自己意識, ○自己調整, ○省察的思考力, ○信頼
AAR サイクル (「見通し」「行動」「振り返り」)		○能動性, ○他者視点の獲得, ○批判的思考力, ○省察的思考力

白井 (2020) より筆者作成

IV 『Education 2030』と一貫地理教育カリキュラム

1) 構成領域の共通性

『Education 2030』のコンピテンシーの構成領域

2 中心部にコンピテンシーの要素, 中心から四方に「知識」「スキル」「価値観」「態度」の指針, その背景に発達の基盤。四つの指針は、「変革をもたらすコンピテンシー」の三つの力に, AAR サイクルの三つを通じて, 動き回るイメージ図。

(「知識」「スキル」「態度及び価値観」と、前述で想定した一貫地理教育カリキュラムの構成領域(【内容】【方法】【価値】)を対比すると、『Education 2030』の「教科の知識」は【内容】に、「教科の手続的知識」および「スキル」は【方法】に、「態度及び価値観」は【価値】に概ね相当する。それら三つは、現行学習指導要領の「資質・能力」となる、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」の三つと親和する。

## 2) 「教科の知識」に相当する【内容】、そして「教科の手続的知識」に相当する【方法】

白井(2020)によれば、『Education 2030』の「教科の知識」は、「教科に固有の概念や詳細なコンテンツを含むもの」とされる。「教科の知識」を学ぶ過程は、知識をより深く理解し、より専門的な知識を獲得する上で必要となる考え方の基盤を築き、新しい知識を生み出すための原材料の役割を持つ。また「教科の知識」は、他の「教科の手続的知識」「教科横断的知識」「手続的知識」の三つの知識の種類の基盤とされる。よって「教科の知識」は、想定した一貫地理教育カリキュラムの【内容】に概ね相当し、地理的概念が含まれる。また「教科の手続的知識」は、各教科の学問原理をどう捉えるかという視点や考え方、手続きに関する知識であるとされ、【方法】のうち、とくに思考に視点や方法として用いられる地理的概念(地理的見方・考え方)に概ね相当する。なお「教科横断的知識」と「手続的知識」は、汎用性の高い概念や思考に関わる知識とみられる。

## 3) 「スキル」に相当する【方法】

『Education 2030』の「スキル」は、①認知スキル(メタ認知を含む)(批判的思考力、創造的思考力、学び方の学習あるいは自己調整など)、②社会・情動的スキル(共感性、自己効力感、責任感、協働性など)、③身体・実用的スキル(物理的な道具や一定の手順、機能などを使いこなす力、新しいICT機器の活用を含む)の三つに分類される。想定した一貫地理教育カリキュラムの【方法】の構成要素となる地理的探究、地理的技能、地理学体系アプローチは、この「スキル」に相当する。

地理的探究は、探究の過程における汎用的な思考ス

キル、分析、検討、意見交換、協議、フィードバックあるいは社会的意義への寄与などが意図される。そのため、①認知スキルおよび②社会・情動的スキルに概ね相当する。地理的技能は、③身体・実用的スキルに概ね相当する。地理学体系アプローチは、【内容】の中のまとまりづくりにも関与するが、地理的探究での地理学体系の学び方から考えると、①認知スキルに概ね相当する。

そして地理的探究、地理的技能、地理学体系アプローチは、地理的概念に従属することになる。例えば地図や地理写真、フィールドワークなどの地理的技能を用いて、地理的概念を背景に置く地理的事象とその意味について、地理的概念を視点として用いて課題を見だし、さらに様々な地理的概念を視点・方法に用いて分析・考察していく地理的探究の過程がとられる。その際に、地理学体系アプローチを用いて、それらの特徴に沿った思考が求められる。

## 4) 「態度及び価値観」に相当する【価値】

『Education 2030』における「態度及び価値観」は、「個人や社会・環境に関するウェルビーイングの実現に向けて行う、個人の選択や判断、ふるまい行動に影響を与える主義や信条」と位置付けられ、○個人としての価値観、○対人関係における価値観、○社会としての価値観、○人間としての価値観とに分類される。「態度及び価値観」の獲得は、「知識」「スキル」の獲得に影響を与え、コンピテンシーを発揮する際の「指導原理」となる。想定した一貫地理教育カリキュラムの【価値】は、一貫性の支柱にある地理的概念「持続可能性」による地理的価値態度とともに、このような『Education 2030』の「態度及び価値観」に概ね相当する。

## 5) 「意図されたカリキュラム」からの示唆

想定した一貫地理教育カリキュラムの構成領域について、『Education 2030』のカリキュラム・デザイン基本原理の一つ、「意図されたカリキュラム」(第3表参照)の五つの観点より、現行の学習指導要領などを踏まえて検討する。第3表中の①に関して、教科の学問的専門性を象徴する地理的概念は、学習の基礎・基本となり、教科で取り上げる学習内容を順序立てて配列し、一貫性の軸を司る。このことは、吉田(2016、

2017), 吉田・管野 (2016), 管野 (2018) が見いだした, 地理的概念の順次性や序列階層性が関与して地理的概念を活用した知識の転移が進展していくことに関係する。②に関しては, 我が国の社会的課題を踏まえた学習指導要領や教科書情報あるいは教員意識などに依拠する。③に関しては, 各学習レベルの配当時間や, 学習内容と方法の兼ね合いもあるが, 地理的事象の意味に関わる様々な概念の活用を重視した内容構成に求められる。④に関しては, ①にも関係し, 地理的概念の活用を中心に, 地理的探究や地理的技能の対応が認識できるような内容構成が求められる。⑤に関しては, 現実社会の課題を取り上げ, 「持続可能性」を学習内容と方法に結び付けるなど, 教科横断的な側面も受け入れ, ②の点も含めて近未来社会的市民性の育成に繋がられる。

総じて『Education 2030』(「知識」「スキル」「態度及び価値観」と, 想定した一貫地理教育カリキュラム(【内容】【方法】【価値】)には, 共通性がみられ, 学習指導要領「資質・能力」とも親和する。よって想定した一貫地理教育カリキュラムの構成領域とその内容は, 理論的に根拠付けられる。

第3表 『Education 2030』のカリキュラム・デザイン基本原理(1)「意図されたカリキュラム」

①一貫性(coherence): 教科で取り上げられる内容は, それぞれの教科の学問的専門性の論理に基づいて, 順序立てて配列すること。それによって, 学習状況や年齢に応じて, 基礎的な概念からより進んだ概念へと進むことが可能になる。
②厳格性(rigor): 教科で取り上げられる内容は, 生徒の発達段階に応じた, やる気を起こさせる内容になっている。かつ, 深い思考や振り返りを可能にするものとする。
③焦点化(focus): 各学年において取り上げる内容を, なるべく少ないものとする。ことによって, 生徒の学習の深さや質を上げるべきである。一方で重要な概念については, 繰り返し取り上げることで確実に内容をカバーすること。
④転移可能性(transferability): ビッグ・アイデアやキー・コンセプトなど, 各学問分野を底支えする重要な概念の発達を促すとともに, スキルや価値観及び態度などの役割を認識できるよう, カリキュラムを構造化すること。
⑤真正性(authenticity): 必要に応じて, カリキュラムを現実社会と関連づけていくこと。そのためには, 学問的な原理に基づいた知識を習得するとともに, 教科横断的あるいは協働的な経験が必要になってくる。

白井 (2020) による。

## V 学習指導要領解説などからみる一貫性の 支柱となる地理的概念の理論化

### 1) 中高地理教育カリキュラムにみる地理的概念

平成29・30年版の中高学習指導要領地理教育カリキュラムの地理的概念に関わる記述の意味を分析し, 一貫性の支柱となるそのあり方について考察する。

地理的分野目標における地理的概念に関する指示についてみると, 中学校社会科地理的分野においては, 「(2) 地理に関わる事象の意味や意義, 特色や相互の関連を, 位置や分布, 場所, 人間と自然環境との相互依存関係, 空間的相互依存作用, 地域などに着目して, 多面的・多角的に考察したり, 地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする力, 思考・判断したことを説明したり, それらを基に議論したりする力を養う」と説明される。また高等学校地歴科地理でも同様となり, 「思考・判断・表現等」に関わる目標から内容(単元)へ地理的概念の活用が紐付けられている。

第4表より, 中高地理教育カリキュラムの内容(単元)に示された「主な地理的概念」「(地理的概念に)着目する視点」「考察・表現等する対象」について分析すると, 中学校地理的分野と高等学校地理総合のA・Bセクションの単元構成には, 「位置や分布」→「場所」→「人間と自然環境との相互依存関係」→「空間的相互依存作用」→「地域」といった地理的概念の順次性が明確にみられ, 中高の大きなカリキュラム・スパンで2回ほど繰り返されている。また中学校地理的分野と高等学校地理総合のCセクションの単元構成には, 吉田 (2016) が指摘した大括りとなる地理的概念の序列階層性(低層:「位置や分布」「場所」, 中層:「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」, 高層:「地域」)に基づき, 学習内容に沿った発展的な地理的概念の積み上げの特徴がみられる。

他方で中学校地理的分野と高等学校地理総合のB・Cセクションの最終単元には, 「空間的相互依存作用」→「地域」がみられ, とくに地誌・テーマのアプローチを通じて, 「持続可能性」への着目が意図されている。

高等学校地理探究では, Aセクションで概ね「場所」→「空間的相互依存作用」, B・Cセクションで概ね「空間的相互依存作用」→「地域」となり, 系統地理と, 地誌・テーマのアプローチによる地理的概念の扱いとなり,

第4表 平成29・30年版中高学習指導要領地理カリキュラムにみる地理的概念に関わる内容の分析

段階	大単元	単元	主な地理的概念	着目する視点	考察・表現などする対象		
中学校 社会科 地理的分野	A 世界と日本の地域構成	(1) 地域構成	位置や分布	大陸と海岸の分布や主な国の位置, 経度や経度	世界の地域構成の特色		
				周辺の海洋の広がりや国土を構成する島々の位置	日本の地域構成の特色		
	B 世界の様々な地域	(1) 世界各地の人々の生活と環境	場所 人間と自然環境との相互依存関係	場所	その生活が営まれる場所の自然及び社会的条件	世界各地における人々の生活の特色やその変容の理由	
					(2) 世界の諸地域	空間的相互依存作用 地域	州という地域の広がりや地域内の結び付き
	C 日本の様々な地域	(1) 地域調査の手法	場所	場所	対象となる場所の特徴	調査の手法やその結果	
					(2) 日本の地域的特色と地域区分	分布 地域	地域の共通点や差異, 分布
		(3) 日本の諸地域	空間的相互依存作用 地域	空間的相互依存作用 地域	地域	地域の広がりや地域内の結び付き, 人々の対応	中核となる事象の成立条件
						(4) 地域の在り方	空間的相互依存作用 地域
	高等学校 地理歴史科	地理総合 A 地図や地理情報システムで捉える現代世界	(1) 地図や地理情報システムと現代世界	位置や分布	位置や範囲	世界的視野から見た日本の位置, 国内や国家間の結び付き	
					位置や範囲, 縮尺	目的や用途, 内容, 適切な活用の仕方	
		B 国際理解と国際協力	(1) 生活文化の多様性と国際理解	場所 人間と自然環境との相互依存関係	場所	その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わり	多様性や変容の要因
						(2) 地球的課題と国際協力	空間的相互依存作用 地域
C 持続可能な地域づくりと私たち		(1) 自然環境と防災	人間と自然環境との相互依存関係 地域	場所	自然及び社会的条件との関わり, 地域の共通点や差異, 持続可能な地域づくり	自然災害への備えや対応	
					(2) 生活圏の調査と地域の展望	空間的相互依存作用 地域	生活圏や生活圏外との結び付き, 地域の成り立ちや変容, 持続可能な地域づくり
地理探究		A 現代世界の系統地理的考察	(1) 自然環境	場所 人間と自然環境との相互依存関係	場所の特徴や自然及び社会的条件との関わり	事象の空間的な規則性, 傾向性や, 関連する地球的課題の要因や動向	
					(2) 資源, 産業	場所 空間的相互依存作用	場所の特徴や場所の結び付き
			(3) 交通・通信, 観光	場所 空間的相互依存作用	場所の特徴や場所の結び付き	事象の空間的な規則性, 傾向性や, 交通・通信, 観光に関わる問題の現状や要因, 解決に向けた取組	
					(4) 人口, 都市・村落	場所 空間的相互依存作用	場所の特徴や場所の結び付き
			(5) 生活文化, 民族・宗教	場所 空間的相互依存作用	場所の特徴や場所の結び付き	事象の空間的な規則性, 傾向性や, 関連する地球的課題の要因や動向	
		B 現代世界の地誌的考察	(1) 現代世界の地域区分	位置や分布 地域	位置や分布	地域の共通点や差異, 分布	地域の捉え方
	(2) 現代世界の諸地域					空間的相互依存作用 地域	地域の結び付き, 構造や変容
	C 現代世界におけるこれからの日本の国土像		空間的相互依存作用 地域	空間的相互依存作用 地域	地域の結び付き, 構造や変容, 持続可能な社会づくり	我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方	

序列階層性に基づく応用的な地理的概念の積み上げとなっている。

吉田 (2016, 2017) によれば, 地理的概念の順次性や序列階層性の特徴は, 既に香港中学校地理2011年版や豪州地理2013年版・NSW 地理2015年版の幼小中高一貫地理教育カリキュラムなどにもみられ, 思考にお

いて地理的概念の活用が計画的に意図され, 現代のコンピテンシー重視の地理教育カリキュラムの特徴としてみられる。よって我が国もそれを潜在的に意図した学習指導要領となってきたといえる。ところで大野 (2019) によれば, 教科内容の順序配列の順次性をみる“Learning Progression”研究は, 主に理想の学習順

序を仮説立て、主に教育効果をみるものとされている。その点で、第4表の本稿においてみる地理的概念の順次性や序列階層性に関する分析の結果は、新たな知見としての展開が期待される。

## 2) 問いの形態・対象・意図の層に関わる地理的概念

平成29・30年版の中高学習指導要領地理教育カリキュラムには、地理的概念が視点や方法になって思考に活用されることについて、問いとともに例示されている(第5表参照)。「どこ、何か」は、地理的事象のそのものの「様態」を対象とし、「どのような」は、地理的事象のそのもの、地理的事象の意味や社会的意義の「様態」を対象とし、「なぜ」は、地理的事象の意味や社会的意義の「要因」(原因・理由)を対象とし、「すべきか」は、地理的事象の社会的意義の「価値」を対象とする問いとなっている。これらによって、授業で地理的概念を視点や方法として活用する際の問いが求

第5表 平成29・30年版中高学習指導要領地理カリキュラムにみる地理的概念の活用と問いの例示

概念	例示(問いとなる疑問詞・助動詞に下線)	意図
位置や分布	・それは <u>どこ</u> に位置するのか、それは <u>どの</u> ように分布するのか	様態
	・ <u>どの</u> ような位置関係にあるのか	様態
	・ <u>なぜ</u> そこに位置するのか	要因
	・ <u>なぜ</u> そのような分布の規則性、傾向性を示すのか	要因
場所	・それは <u>どの</u> ような場所なのか	様態
人間と自然環境との相互依存	・そこでの生活は、周囲の自然環境から <u>どの</u> ような影響を受けているか	様態
	・そこでの生活は、周囲の自然環境に <u>どの</u> ような影響を与えているか	様態
	・ <u>なぜ</u> そのような影響を受けているのか	要因
	・ <u>なぜ</u> そのような影響を与えているのか	要因
	・ <u>どの</u> ような自然の恩恵を求めるのか	様態
	・ <u>どの</u> ように自然に働きかけるのか	様態
	・ <u>どの</u> ように自然の恩恵を守り、維持していくべきか	価値
	・ <u>どの</u> ように自然を開発し、生活をよりよくしていくべきか	価値
空間的相互依存	・そこは、それ以外の場所と <u>どの</u> ような関係をもっているのか	様態
	・ <u>なぜ</u> 、そのような結び付きをしているのか	要因
	・ <u>どの</u> ようにその結び付きをよりよくしていくべきか	価値
地域	・その地域は、 <u>どの</u> ような特徴があるのか	様態
	・この地域と他の地域では <u>どこ</u> が異なっているのか	様態
	・ <u>なぜ</u> 、この地域はそのようなになったのか	要因
	・ <u>どの</u> ような地域にすべきか	価値

められる。そしてこれらの問い形態(疑問詞および助動詞)と対象(○地理的事象そのもの、○地理的事象の意味、○地理的事象の社会的意義)とその意図(「様態」「要因」「価値」)には、地理的事象→地理的事象の意味→地理的事象の意味の社会的意義、また「様態」→「要因」→「価値」といった展開を重ねてみることができ、地理的概念の順次性や序列階層性との関わりも見いだせる。つまり吉田(2016)が示す、地理的概念の活用に関わる問い形態と対象およびその意図の層に基づく学習展開の原理としてみられる。

ところで吉田(2017)や菅野(2018)によれば、NSW地理2015の一貫地理教育カリキュラムにおける学校種・学年・単元・一授業などの大小の各カリキュラム・スパンには、地理的概念の順次性が図られている。このことを踏まえると、問い形態と対象およびその意図の層に関わる地理的概念の順次性や序列階層性は、中等段階に限らず、幼小中高一貫地理教育カリキュラムにおける様々なカリキュラム・スパンの内容において反映させることが可能となる。

## 3) 幼稚園教育と小学校生活科にみる地理的概念

吉田(2020b)によれば、地理教育との関わりが見込まれる平成30年版の幼稚園教育要領における「環境」領域のねらいには、「(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で～」「(2)身近な環境に自分から～」、内容にも「(1)自然に触れて生活し～」「(3)季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く～」「(6)日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ～」などの記述がみられ、活動や体験、あそびと表現の活動を通じて「場所」への着目が求められる。

また平成30年版の小学校学習指導要領解説生活編の目標においては、「(1)自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わりに気付く～」「(2)身近な人々、社会及び自然と自分との関わりで捉え」「(3)身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊にしたりしようとする態度～」などの記述がみられる。学年の目標の趣旨にも「(1)学校、家庭及び地域の生活に関わること～」「自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考える～」「地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全

第6表 平成29年版小学校学習指導要領社会科カリキュラムにみる地理的概念に関わる内容の抽出

学年単元	単元となる内容*	着目する視点	考察・表現などする対象	地理的概念**
第3学年 市を中心とする地域社会に関する内容	(1)身近な地域や市区町村の様子【地理区分】(地図, 白地図)	都道府県内における市の位置, 市の地形や土地利用, 交通の広がり, 市役所など主な公共施設の場所と働き, 古くから残る建造物の分布など	(身近な地域や市の様子を捉え) 場所による違い	○位置と分布 ○場所
	(2)地域に見られる生産や販売の仕事【公民区分】(地図, 白地図)	仕事の種類や産地の分布, 仕事の工程など	(生産に携わっている人々の仕事の様子を捉え)地域の人々の生活との関連	○位置と分布 ○場所
		消費者の願い, 販売の仕方, 他地域や外国との関わりなど	(販売に携わっている人々の仕事の様子を捉え)それらの仕事に見られる工夫	○空間的相互依存作用
	(3)地域の安全を守る働き【公民区分】(地図)	施設・整備などの配置, 緊急時への備えや対応など	(関係機関や地域の人々の諸活動を捉え)相互の関連や従事する人々の働き	○空間的相互依存作用
(4)市の様子の移り変わり【歴史区分】(地図)	交通や公共施設, 土地利用や人口, 生活の道具などの時期による違い	(市や人々の生活の様子を捉え)それらの変化	○地域	
第4学年 県を中心とする地域社会に関する内容	(1)都道府県の様子【地理区分】(地図帳, 白地図)	我が国における自分たちの県の位置, 県全体の地形や主な産業の分布, 交通網や主な都市の位置など	(県の様子を捉え) 地理的環境の特色	○人間と自然環境との相互依存関係
	(2)人々の健康や生活環境を支える事業【公民区分】(地図)	供給の仕組みや経路, 県内外の人々の協力など	(飲料水, 電気, ガスの供給のための事業の様子を捉え)それらの事業が果たす役割	○人間と自然環境との相互依存関係
		処理の仕組みや再利用, 県内外の人々の協力	(廃棄物の処理のための事業の様子を捉え)その事業が果たす役割	○人間と自然環境との相互依存関係
	(3)自然災害から人々を守る活動【公民区分】(地図)	過去に発生した地域の自然災害, 関係機関の協力など	(災害から人々を守る活動を捉え)その働き	○空間的相互依存作用
	(4)県内の伝統や文化, 先人の働き【歴史区分】(地図)	歴史的背景や現在に至る経過, 保存や継承のための取組など	(県内の文化財や年中行事の様子を捉え)人々の願いや努力	○地域
当時の世の中の課題や人々の願い		(地域の発展に尽くした先人の具体的事例を捉え)先人の働き	○地域	
(5)県内の特色ある地域の様子【地理区分】(地図帳, 白地図)	特色ある地域の位置や自然環境, 人々の活動や産業の歴史的背景, 人々の協力関係など	(地域の様子を捉え) それらの特色	○地域	
第5学年 我が国の国土と産業に関する内容	(1)我が国の国土の様子と国民生活【地理区分】(地図帳, 地球儀)	世界の大陸と主な海洋, 主な国の位置, 海洋に囲まれ多数の島からなる国土の構成など	(我が国の国土の様子を捉え) その特色	○位置と分布 ○場所
		地形や気候など	(国土の自然などの様子や自然条件から見て特色ある地域の人々の生活を捉え) 国土の自然環境の特色やそれらと国民生活との関連	○人間と自然環境との相互依存関係
	(2)我が国の農業や水産業における食料生産【公民区分】(地図帳, 地球儀)	生産物の種類や分布, 生産量の変化, 輸入など外国との関わりなど	(食料生産の概要を捉え)食料生産が国民生活に果たす役割	○空間的相互依存作用
		生産の工程, 人々の協力関係, 技術の向上, 輸送, 価格や費用など	(食料生産に関わる人々の工夫や努力を捉え)その働き	○空間的相互依存作用
	(3)我が国の工業生産【公民区分】(地図帳, 地球儀)	工業の種類, 工業の盛んな地域の分布, 工業製品の改良	(工業生産の概要を捉え)工業生産が国民生活に果たす役割	○位置と分布 ○場所
		製造の工程, 工場相互の協力関係, 優れた技術など	(工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉え)その働き	○場所
	(4)我が国の産業と情報との関わり【公民区分】	交通網の広がり, 外国との関わりなど	(貿易や運輸の様子を捉え)それらの役割	○空間的相互依存作用
		情報を集め発信するまでの工夫や努力など	(放送, 新聞などの産業の様子を捉え)それらの産業が国民生活に果たす役割	○地域
(5)我が国の国土の自然環境と国民生活の関わり【地理・公民区分】(地図帳)	情報の種類, 情報の活用の仕方など	(産業における情報活用の現状を捉え)情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割	○地域	
	災害の種類や発生の位置や時期, 防災対策など	(国土の自然災害の状況を捉え) 自然条件との関連	○人間と自然環境との相互依存関係	
	森林資源の分布や働きなど	(国土の環境を捉え) 森林資源が果たす役割	○人間と自然環境との相互依存関係	
	公害の発生時期や経過, 人々の協力	(公害防止の取組を捉え)	○地域	

		や努力など	その働き	
第6学年 我が国の政治と歴史、国際理解に関する内容	(1)我が国の政治の働き【公民区分】	日本国憲法の基本的な考え方	(我が国の民主政治を捉え)日本国憲法が国民生活に果たす役割や、国会、内閣、裁判所と国民との関わり	
		政策の内容や計画から実施までの過程、法令や予算との関わりなど	(国や地方公共団体の政治の取組を捉え)国民生活における政治の働き	
	(2)我が国の歴史上の主な事業【歴史区分】(地図)	世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産など	(我が国の歴史上の主な事象を捉え)我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味	
		(3)グローバル化する世界と日本の役割【公民区分】(地図帳、地球儀)	外国人の人々の生活の様子など	
		地球規模で発生している課題の解決に向けた連携・協力など	(国際連合の働きや我が国の国際協力の様子を捉え)国際社会において我が国は果たしている役割	○空間的相互依存作用 ○地域

\*【地理区分】：地理的環境と人々の生活、【歴史区分】：歴史と人々の生活、【公民区分】：現代社会の仕組みや働きと人々の生活。【地理区分】と【歴史区分】は空間的な広がり念頭に、地域、日本、世界と、【公民区分】は経済・産業、政治及び国際関係と、整理されている。地図、白地図、地図帳、地球儀などの付記は、それらの活用が指示されている単元。

\*\*「学年単元」「単元となる内容」「着目する視点」「考察・表現などする対象」の内容を総合して、抽出できると筆者が解釈した地理的概念を表記。「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」「地域」の表記は、「位置と分布」「場所」との関わりを前提とする。第6学年(1)政治単元と(2)歴史単元では解釈が困難なため、個別的な地理的概念を抽出していない。

で適切な行動をしたり～」などの記述がみられる。加えて第3学年の社会科との関連についても「身の回りにはみんなのものや場所があると気付いたりすることは～」との記述がみられる。これらによって、活動を通じて、「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」への着目が求められる。

幼稚園教育と小学校生活科には、自己との直接的な関わりから、地理的概念として身の回りの「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」が潜在的な「位置と分布」を前提にして考えられる。幼稚園と小学校生活科の教育を通じて、児童主体の生活行動に関わる環境拡大とともに、地理的概念の基礎を養うことが一貫地理教育カリキュラムにおいて求められる。

#### 4) 小学校社会科にみる地理的概念

平成29年版の小学校学習指導要領社会編の記述について、地理の区分に限らず、歴史・現代社会の区分も含めて総合的に捉えるために、「学年単元」「単元となる内容」「着目する視点」「考察・表現などする対象」にみられる記述の意味の中から抽出できると解釈した地理的概念について分析する(第6表)。その結果、各学年には、概ね地理的概念として解釈できる意味がみられ、それらによる順次性が見いだされる。

吉田(2022)によれば、平成29年版の小学校社会科には、三分野区分の特徴からみる「分化社会科」と、それら三分野が単元構成を通じて総合する特徴からみる「総合社会科」の融合的な性格を兼ね備えている。よって地理的概念の順次性は、「分化社会科」と「総合

社会科」の特徴の中から見いだされることになるが、地理教育カリキュラムとしての一貫性にも寄与する。とくに「空間的相互依存作用」や「地域」の意味は、各学年後半部で積み重なる。加えてほとんどの単元には、地図、白地図、地図帳、地球儀などの地理的技能となる作業技能の活用が指示されている。そのため、地理的概念の理解と活用は、潜在的でありながらも必然とみられる。よって幼稚園と小学校生活科も含めた初等教育では、一貫地理教育カリキュラムにおいて地理的概念の順次性や序列階層性のもとに、全ての地理的概念についての初歩的理解の段階としてみられる。

期	学校段階と内容セクション	地理的概念の扱い	レベル*
I	幼稚園教育	順次性や序列階層性をもとにした初歩的理解	K
	小学校生活科(低)		1
	小学校社会科(中)		2
	小学校社会科(高)		3
II	中学校地理的分野 A・Bセクション	順次性① ↓	4
III	中学校地理的分野 Cセクション	序列階層性①<発展> 「持続可能性」	5
IV	高等学校地理総合 A・Bセクション	順次性② ↓	6
V	高等学校地理総合 Cセクション	序列階層性②<発展> 「持続可能性」	7
VI	高等学校地理探究 A・Bセクション Cセクション	序列階層性③<応用> 「持続可能性」	8

\*一貫地理教育カリキュラムにおける九つの学習段階。

第1図 平成29年版幼稚園教育要領解説と平成29・30年版小中高学習指導要領解説から抽出した地理的概念の扱いに関わる学習段階(シークエンス)の原理

## 5) 幼小中高における地理的概念の一貫性

以上から第1図より、地理的概念の特徴による幼小中高一貫地理教育カリキュラムの学習段階(I~VI期)が考えられる。地理的概念の順次性や序列階層性に基づき、全ての地理的概念の初歩的理解のI期を経て、II期からIV期への大きなカリキュラム・スパンにおける地理的概念の順次性の繰り返しと、III期からV期への小さなスパンにおける発展部での地理的概念の序列階層性の繰り返しを経て、VI期の応用的な地理的概念の序列階層性に至る。加えてIII・V・VI期のCセクションには、「持続可能性」の意図がみられ、それは、各A・Bセクションのまとめの意味として位置付く。

地理的概念は、「持続可能性」の意味を含め、学習内容と方法の広がりや深まりによってその理解と活用が進展していく。ただしI期は、他と比べて長期間の捉えとなるため、学校種と教科の特性などから幼稚園教育、小学校生活科、小学校社会科中学年、小学校社会科高学年とに便宜的に分けて考える意義がある。そこでこれらの議論から学習段階は、Kおよび1~8レベルの九つとし、地理的概念を支柱にする一貫地理教育カリキュラムのシークエンスの原理として用いられる。

## VI 幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークの構築

以上の成果を総合し、次の10項目の取り扱いと、第7表および第1・2図より、幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークは、構築される。

- ①カリキュラムのねらいは、目標とする【内容】(地理的概念を基礎・基本とする知識の理解)、【方法】(地理的概念の活用)に依拠する思考力・判断力・表現力に関わるスキル)、【価値】(「持続可能性」に関わる地理的価値態度および近未来社会的市民性)の三つの構成領域を総括する。そしてSDGsや『ESD for 2030』のねらいとも関連する、OECD『Education 2030』の一人ひとりのウェルビーイング(11項目などによるエコシステムでの生き方)実現のために設定される。地理的概念は、【内容】【方法】【価値】の三つの構成領域に属し、それらの重なり合いにおいて一貫性の支柱になるものとする。
- ②【内容】における地理的概念は、地理的事象、地理的事象の意味、地理的事象の意味における社会的意

義による「地理的事象の三層」の背景にある。そして地理的概念は、『地理教育国際憲章』の五つに、「持続可能性」を加えた六つとし、学習進展に沿って全ての地理的概念の初歩的な理解から、地理的概念の順次性や序列階層性などによって位置付くものとする。

- ③【方法】における地理的概念は、発問や活動指示などの思考動作のために活用される視点や方法とする、地理的見方・考え方として捉える。発問や活動指示などの思考動作には、一貫地理教育カリキュラム上、大小のカリキュラム・スパンに応じる地理的見方・考え方の連なりが見いだせる。ただしその意図は、小さな発問や活動指示などの思考動作においては、不明瞭となるため、小さくとも1時間の授業内の学習課題や副発問において求められる。また【方法】における地理的概念は、【内容】にみる地理的概念の意味に対応するため、双方には、連動したカリキュラム上での意図が計画される。
- ④【方法】における地理的探究は、課題解決のための地理情報の処理過程とする。処理過程の各段階は、獲得(地理的課題の設定、地理情報の収集・選択)、処理(地理情報の吟味、分析・考察)、伝達(手段の選定、学習成果の反映)とし、その中で【内容】に応じて必要とされる地理的技術の活用が意図される。
- ⑤【方法】における地理的技術は、地理的見方・考え方や地理的探究のための道具となる作業技術とする。○地図・地図帳・地球儀、○フィールドワーク、○地理写真・動画、○GIS、○統計処理、○ICTやAI、新たなテクノロジーによる様々なアプリケーション活用などがあげられる。近未来社会における地理写真・動画は、新しいタイプの教材となり、デジタル教科書教材やICT・AI活用の高度化をはじめ、バーチャル・リアリティ(仮想現実)やアグメンティッド・リアリティ(拡張現実)などのアプリケーションの活用を通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図る。【価値】にも関係することになるが、『Education 2030』のコンピテンシーの要素をもとに、『ラーニング・コンパス』の「エージェンシー」「変革をもたらすコンピテンシー」「AAR」などの学習方略への配慮も必要とする。

第7表 近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワーク

<p><b>■根拠■ (Rationale)</b></p> <p>近未来社会の教育には、ICT 活用の高度化、デジタル教科書教材や AI 利用の進展、DX や Society5.0 などへの対応が求められている。これらによって幼稚園・小学校・中学校・高等学校などの地理教育においても、実空間の様々な制約と移動を伴わない情報社会の著しい変化に直面し、地理的事象とその意味・意義の変化や、それらの背景にある普遍的な地理的概念の扱い方などについて見直す時期に来ている。そこで近未来社会に応じた効果的な地理教育のあり方について、Society5.0 の特性を踏まえ、地表面における自然と人文の諸事象間の意味や意義などの学習を通じて、人間形成のための一貫した地理教育を考えていく意義がある。</p> <p>そこで近年の主要な教育政策を踏まえ、近未来社会に求められる地理教育の課題を整理・検討すると、次の四つがあげられる。</p> <p>①変容する地理的事象とその意味・社会的意義の取り上げの吟味や更新は、重要である。しかし地理教育の支柱を考えると、地理学の専門領域の特徴を象徴する地理的概念を地理教育の学習の基礎・基本として一層重視する必要がある。変容する地理的事象の背景にある地理的概念の本質には、普遍性を伴うからであり、また地理的概念が地理教育における鍵概念として、我が国も含め、多くの諸外国地理教育カリキュラムのねらいなどに含まれ、重要な扱いになっているからである。</p> <p>②個別最適的な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められている学校教育に向けて、一人ひとりの地理学習者のための地理教育を保障しながら、民主主義を進展させる近未来社会的市民性を育成する必要がある。幼児・児童・生徒の発達段階に応じた一人ひとりの自律的な地理学習に着目することは、近未来社会の先進的な資質・能力の検討を要する、新たな時代の地理教育研究の課題とみられる。</p> <p>③幼児期の発達においては、幼児自身が自発的に環境に関わり、生活の中で状況と関連付けて身に付けていくが重要とされているが、これまでの地理教育では、ほとんど着目されて来なかった。そのため、幼児期から一貫して、一人ひとりの自律的な地理学習を考える意義があり、とくに幼児期の地理教育では、長期的な見通しに立って、体験などを通して他者や環境とのかかわりとともに、善悪の判断につながる基本的な区別が自律的にできるように学習させ、近未来社会的市民性の育成に繋げていく必要がある。</p> <p>④①②③をもとに教育効果を一層高めるために、近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムを創造する意義がある。地理教育全体の一層の充実を図り、様々な学校種の教員が体系的に地理教育を見通せる幼小中高一貫地理教育カリキュラムを創造していくためには、まずそのフレームワークを理論的に根拠付けて明確にする必要がある。</p>
<p><b>■ねらい■ (Aim)</b></p> <p>子どもたちは、幼稚園・小学校低学年・小学校中学年・小学校高学年・中学校・高等学校の六つの段階を通じて、地理的探究を通して地理的技能を身に付け、地理学体系のもとにある地表面の身近から世界に至るまでの自然と人文の様々な「地理的事象の三層」(地理的事象やその意味・社会的意義)を、その背景にある地理的概念を基礎・基本として、それらに関する地理的知識を発達させる。</p> <p>そして ESD に関わる持続可能な社会づくりに向けた「持続可能性」を通して得られる地理的価値態度や、Society5.0 に応じる一人ひとりの地理学習者が求めるウェルビーイング実現に向けて、『Education 2030』より求められる教育方略やコンピテンシーの要素を通して、デジタル技術利用の行動規範を備え、個人や社会・環境に関するウェルビーイングの実現に向けた個人の選択や判断あるいはふるまい行動に影響を与える主義や信条を持ち、民主主義や国民統合などを進展させる近未来社会市民性を養う。</p> <p>そのために、子どもたちには、目標として相互に関係し合う【内容】【方法】【価値】の構成領域の重なり位置に位置付く地理的概念(以後「■」でその意味を示す)を一貫性の支柱に据え、その他の各構成領域の一貫性の軸(以後「○」でその意味を示す)となる構成要素を総合させながら、学び高めていくように教育活動を計画する。</p>
<p><b>■目標■ (Objectives) —三つの構成領域【内容】【方法】【価値】と構成要素—</b></p> <p><b>【内容】(Knowledge and Understanding) 地理的概念を基礎・基本とする地理的知識：</b></p> <p>「地理的事象の三層」の背景にある地理的概念を基礎・基本として、それらに関する地理的知識を発達させる。</p> <p>■地理的概念は、「位置や分布」、「場所」、「人間と自然との相互依存関係」、「空間的相互依存作用」、「地域」、「持続可能性」からなり、地理教育カリキュラムにおいて順次性や序列階層性などを伴って意図され、配置される。</p> <p>○「地理的事象の三層」は、地理的事象、地理的事象の意味、地理的事象の意味における社会的意義からなり、地理学体系(地誌、系統地理、テーマ地理)から学習の内容として構成される。</p> <p>*補足：地理的概念の順次性とは、概ね「位置や分布」→「場所」→「人間と自然との相互依存関係」→「空間的相互依存作用」→「地域」→「持続可能性」となること。地理的概念の序列階層性とは、概ねⅠ：「位置や分布」・「場所」→Ⅱ：「人間と自然との相互依存関係」・「空間的相互依存作用」→Ⅲ：「地域」・「持続可能性」と</p>

なること。「持続可能性」は、概ね環境保全、相互作用による社会変化、地域格差の是正、国際協力、人権や様々な地域的アイデンティティの尊重などに向き合う資質と係わること。

**【方法】(Skills) 地理的概念の活用に依拠する思考力・判断力・表現力に関わるスキル：**

思考する際の視点や方法として活用される地理的概念、地理的探究と地理的技能の適用、地理学体系アプローチなどを通じて、思考力・判断力・表現力に関わるスキルを発達させる。

- 地理的概念：地理的概念を活用して思考・判断・表現等する視点や方法（地理の見方・考え方）。
- 地理的探究：課題解決のための地理情報などの処理過程（獲得、処理、伝達）。
- 地理的技能：道具となる作業技能（地図・GIS・地理写真・統計・フィールドワーク・テクノロジーなど）。
- 地理学体系：地誌（動態、静態、比較）・系統地理（自然地理、人文地理）・テーマ地理。
- \*補足：ICT・AI活用の高度化や、仮想現実や拡張現実などの新しいテクノロジーによるアプリケーションを多様に活用し、『Education 2030』のコンピテンシーの要素をもとに、『ラーニング・コンパス』の「エージェンシー」「変革をもたらすコンピテンシー」「AAR（ふりかえりサイクル）」に配慮しながら、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図る。

**【価値】(Values and Attitude) 「持続可能性」を通して得られる地理的価値態度そして近未来社会市民性：**

持続可能な社会づくりに向けた「持続可能性」を通じて得られる地理的価値態度、そして Society5.0 に応じる一人ひとりの地理学習者が求めるウェルビーイング実現に向けて、近未来社会市民性を発達させる。

- 地理的価値態度：『ESD for 2030』に関わる持続可能な社会づくりに向けた地理的概念「持続可能性」を通じて得られる地理的価値態度。
- 近未来社会市民性：デジタル技術利用に関わる行動規範を備え、個人や社会・環境に関するウェルビーイングの実現に向けて行う、個人の選択や判断、ふるまい行動に影響を与える主義や信条を持ち、民主主義や国民統合を進展させる資質。

※三つの構成領域と構成要素は、内容構成（スコープ）（第2図）の原理として総合され、学習段階（シークエンス）（第1図）の原理に沿って学習展開されていくものとする。



第2図 近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムの内容構成（スコープ）の原理

⑥【方法】における地理学体系アプローチは、地理学に依拠した方法を用いて考えるためのものとする。  
○地誌（静態地誌、動態地誌、比較地誌）、○系統地理（自然地理、人文地理）、○テーマ地理（地域振興、防災ほか）の各アプローチの他に、就学前・小

学校の発達段階では、とくに社会機能に配慮した環境拡大アプローチ（同心円の拡大）の方法がとられる。

⑦【価値】における地理的概念は、ESDに関わる持続可能な社会づくりに向けられた「持続可能性」を通

じて得られる地理的価値態度に寄与する。「持続可能性」には、他の五つの地理的概念に基づくことを前提にして、【内容】と【方法】に含まれる価値の理解と活用およびそれらへの評価、社会的価値判断力や意思決定力、社会貢献に繋がる構想力や行動力の発達が求められる。

- ⑧【価値】における近未来社会的市民性は、近未来社会の教育に必要となるデジタル技術活用の行動規範や、個人や社会・環境に関するウェルビーイングの実現に向けて行う、個人の選択や判断、ふるまい行動に影響を与える主義や信条を備え、民主主義社会や国民統合の進展を担う資質とする。
- ⑨地理的概念を支柱とする幼小中高一貫地理教育カリキュラムとしての学習段階は、Kおよび1～8レベルまでの九つとする。
- ⑩カリキュラムのフレームワークは、第7表のもとに、第1図を学習段階（シークエンス）の原理とし、第2図を内容構成（スコープ）の原理とする。

## Ⅶ むすび

本稿は、Society5.0の一人ひとりの地理学習者のウェルビーイング実現に向け、地理的概念を学習の基礎・基本とする近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークについて理論的に根拠付けながら総合的に構築することを目的とした。主な成果は、次の三つである。

- 1) 国内外の教育政策的な地理教育カリキュラムの潮流を検討した上で地理教育の基礎・基本となる地理的概念を中心に考察し、地理的概念を支柱とする一貫地理教育カリキュラムの構成領域を想定した。
- 2) 『Education 2030』の一人ひとりのウェルビーイング実現に求められるコンピテンシーの要素に基づく「エージェンシー」「変革するコンピテンシー」「AAR」に着目して検討した。その結果と想定した一貫地理教育カリキュラムの構成領域の共通性などを吟味することを通じて、一貫地理教育カリキュラムの内容構成（スコープ）の原理について根拠付けた。
- 3) 平成29年版幼稚園教育要領解説や平成29・30年版小中高の学習指導要領社会解説・地理歴史解説

における地理的概念に関わる記述の意味について分析し、地理的概念を支柱にする一貫地理教育カリキュラムとして地理的概念の順次性や序列階層性の特徴を考察し、学習段階（シークエンス）の原理について導き出した。その上で研究成果を総合し、近未来社会型の幼小中高一貫地理教育カリキュラムのフレームワークを構築した。

課題は、具体的な単元開発を通して、一貫性の支柱となる地理的概念の扱い方や、一貫性の様々な軸との関わり方などについて検討・考察していくこと、理論と実践の往還や新しいテクノロジーの組み入れを見据え、その具体を作り上げていくこと、諸外国地理教育カリキュラムの最新の動向も検討していくことなどがあげられる。加えて『地理教育国際憲章』の地理的概念を我が国で用いた妥当性についても、様々な点から吟味・更新することも視野に入れる必要がある。例えば我が国の伝統的な地理思想や地理教育史などから地理教育カリキュラムの支柱となる地理的概念を見いだすことも考えられる。むしろ諸外国地理教育カリキュラムのほとんどは、独自の地理的概念を地理教育カリキュラムに位置付けている。さらに社会系教科教育からみた場合、本稿の成果は、一貫歴史教育カリキュラムなどへの応用が期待できる。例えば歴史的事象とその意味・社会的意義、歴史的概念（時代区分、原因と結果、変化と連続、歴史的意義ほか）、歴史的技能（年表、史資料、遺物ほか）、歴史学体系アプローチ（通史、史的システム論、テーマ史）などからの検討も可能となる。

## <付記>

本稿は、2022年度日本地理教育学会研究大会および2022年度日本社会科教育学会研究大会の各発表の成果に加筆修正したものである。

## 【文献】

- 井田仁康 (2016) : 高等学校「地理」の動向と今後の地理教育の展望. 人文地理, 68 (1), pp.66-78.
- 大西宏治訳/ハウブリットほか (2008) : 持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言. 新地理, 55 (3・4), pp.33-38.
- 大野栄三 (2019) : 教科とカリキュラム. 日本カリキュラム学会編『現代カリキュラム研究の動向と展望』教育出版, pp.34-41.
- 管野友佳 (2018) : 小中高一貫地理カリキュラムにおける地理的概念の原理—オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州地理シラバス2015年版の場合—. 新地理, 66 (3), pp.1-11.
- 坂本旬 (2020) : デジタル・シティズンシップとは何か. 坂本旬ほか『デジタル・シティズンシップ—コンピュータ1人1台時代の善き使い手をめざす学び』大月書店, pp.2-37.
- 白井俊 (2020) : 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー, 資質・能力とカリキュラム—』ミネルバ書房.
- 内閣府総合科学技術・イノベーション会議 (2022) : 『Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ』. pp.1-69.
- 中橋雄 (2021) : 概念・構成要素に関する研究. 中橋雄編『メディア・リテラシーの教育論—知の継承と探究への誘い』北大路書房, pp.11-22.
- 中山修一訳/IGU-CGE 編 (1993) : 地理教育国際憲章1992年8月制定. 地理科学, 48 (2), pp.104-119.
- 中山修一・佐藤真久 (2011) : 国連ESDの10年ユネスコ国際実施計画の策定とアジア太平洋地域におけるESDの展開にむけて. 中山・和田・湯浅編 (2011) : 『持続可能な社会と地理教育実践』古今書院, pp.16-25.
- 永田佳之 (2020) : 'ESD for 2030' を読み解く : 「持続可能な開発のための教育」の真髄とは. ESD 研究, 3, pp.5-17.
- 日本学術振興会地域研究委員会・地球惑星科学委員会合同地理教育分科会 (2017) : 提言 持続可能な社会づくりに向けた地理教育の充実. <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t247-6.pdf> (2022年6月26日)
- 松井晋作 (2020) : 日本ユネスコ国内委員会とユネスコが捉えるESDとGCEDの概念の違い : 日本のユネスコスクールへの学びの方策の提言. ESD 研究, 3, pp.40-49.
- 文部科学省 (2018a) : 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 社会編 平成29年7月』東洋館出版社.
- 文部科学省 (2018b) : 『幼稚園教育要領解説 平成30年3月』フレール館.
- 文部科学省 (2018c) : 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 社会編 平成29年7月』日本文教出版.
- 文部科学省 (2019) : 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 地理歴史編 平成30年7月』東洋館出版社.
- 山口幸男・西木敏夫・八田二三一ほか6名 (2008) : 小・中・高地理教育一貫カリキュラムの提案. 山口・西木ほか3名編『地理教育カリキュラムの創造』古今書院, pp.1-29.
- 吉田剛 (2011) : 社会科地理的分野における地理の見方・考え方と地理的技能の枠組み—内容知と方法知の視点から—. 新地理, 59 (2), pp.13-32.
- 吉田剛 (2016) : 諸外国地理カリキュラムにみる「持続性」に関する地理的概念. 新地理, 64 (3), pp.82-92.
- 吉田剛・管野友佳 (2016) : オーストラリアにおける「ニューサウスウェールズ州」および「連邦」地理カリキュラムの地理的概念の機能に関する比較研究—コンピテンシー・ベースによる地理カリキュラムからの示唆—. 社会系教科教育学研究, 28, pp.101-110.
- 吉田剛 (2017) : 地理的概念の機能に着目した日米地理カリキュラムの比較研究. 社会科教育論叢, 50, pp.61-70.
- 吉田剛 (2020a) : 地理教育と地学教育の整合に向けた論点—「学術/教育」と「統一/不統一」にみる地理の見方・考え方に焦点を当てて—. 地理, 65 (12), 古今書院, pp.47-51.
- 吉田剛 (2020b) : 初期の地図リテラシーの理論化—認知地図形成と地理的概念による一試論—. 日本地理教育学会『入門期の地図活用研究グループ研究報告』, pp.17-22.
- 吉田剛 (2022) : 地理教育目標となる地理的概念—2000年前後の我が国の地理教育論争を乗り越えて—. 季刊地理学, 74 (3), p.143.

(令和5年1月25日受理)

# The Framework of Geography Education Curriculum Consistent with Kindergarten, Elementary School, Junior High School, and High School for the Near-Future Society

YOSHIDA Tsuyoshi

## Abstract

The purpose of this paper is to create a framework of geography education curriculum consistent with kindergarten, elementary school, junior high school, and high school in the near-future society type, in which geographical big concepts are the basis of learning, in order to realize the well-being of geography learners. The main results are as follows (1)(2)(3).

(1) After studying the trends in geography education in Japan and overseas, we focused on the geographical concepts that forms the basis of geography education. and we assumed the areas that would constitute a consistent curriculum. (2) Focusing on the element of competency in the OECD “Education 2030”, we examined the commonality of the constituent areas of the assumed a consistent curriculum, grounded a principle of content organization “scope” of a consistent geography education curriculum. (3) Analyzing the descriptions related to geographical concepts in the current kindergarten educational guidelines and the current educational guidelines for elementary and junior high social studies and high school geography education. As developing a consistent geography education curriculum with geographical concepts as the main pillar, we considered geographical concepts have sequentially and order hierarchy, grounded the characteristics of such geographical concepts as a principle of learning stages “sequence” of a consistent geography education curriculum. Based on this, we theorized a framework for geography education curriculum consistent with kindergarten, elementary school, junior high school, and senior high schools for the near-future society.

**Key words** : Society5.0, well-being, OECD 『Education2030』, geographical concepts, sustainability